



このレポートは、私・和仁が毎月のコンサルティング活動や日常生活を通して気づき、学ばせて頂いたことを書き留めたものです。
お気軽にご笑読頂ければ幸いです。

【今月の気づき】



『考えごとは、“上書き更新”するために書く。』

「**考**えが堂々巡りしてしまっていて、なかなか解決策が見つけれないとき、どうしたらいいでしょうか？」

セミナーで参加者からそう尋ねられたとき、わたしは次のように答えました。

「その堂々巡りしている考えを紙に書いてみてください」

「書いているうちに、俯瞰して今の状況を眺められ、妙案が浮かぶこともあるから」

でも、彼らがそれを実際にやるかと言うと、ほとんどの人は再び頭の中だけでグルグル考えているようです。わたしにはそれが不思議で仕方ありませんでした。

そこであるとき、同じ状況から抜け出せずにいる人に尋ねてみました。

「なぜ、紙に書こうとしないんですか？」 すると、彼は答えました。

「何を書いているか、わからないから」

もう少し踏み込んで聴いていくと、彼の本当の答えは、こうでした。

「悩みの答えを書こうとして、それが思い浮かばず、手がとまったままだった」

そのときわたしはハッと気づきました。紙に書くということの定義がこの人とわたしとは違うのだと。彼の発想は、「**答えを探して、それを紙に書く**」でした。

これでは「紙に書く」ことが「手段」にはならない。この発想を変える必要があります。

わたしの発想は、「**紙に何かを書きながら、答えを探す**」です。はじめから一発で正解を探し当てようと思うから、はじめの一步が踏み出せないのです。

あとで何度も「上書き更新」する前提で、今の考えをとりあえず書く。

3日経つと、その3日間の経験を蓄積した自分が「3日前の考え」に対して修正したくなる場所が出てくる。そこを上書き更新していく。「あとで上書き更新する」ことを前提にすれば、いくらか肩の力も抜けて、気軽に書き始められるようです。これは、ビジョン設定やプランづくりでも同じことだと思いました。これからは、書きながら考えましょう。

【今月の一冊から】

『自立タイプの依存と、依存タイプの依存の違い。』

>開発援助を受けることと経済開発を成功させることは、逆の相関関係にあった。開発援助
>を多く受けた国では、経済はほとんど発展しなかったか、かえって悪化した。ちょうど国
>内の福祉と同じように、開発援助という名の福祉の受給国は、援助されるほど発展できな
>くなった。

（『歴史の哲学』 P. F. ドラッカー 著 ダイヤモンド社 P.182 より引用）

先日仲間とのミーティングで、「自立型のクライアントと依存型のクライアント」の定義について話し合ったときのこと。

我々ユメオカやワニマネジメントは、「自立型クライアントが多い」と認識しています。それは、我々のコンサル・スタイルは、クライアント自身のビジョンを起点にして形作っていくため、「これをやりたい！」という意志を持つクライアントでないと機能しないからです。逆に受け身で「売上がラクにつくれる秘策を教えてください」という人はわたしたちのサービスには向いていません。

ところが先日、この「自立と依存」の定義の解釈が、仲間内でも微妙に違っていることに気がつきました。

「自立型とは、どこまで自立している人をさすのか？」
「依存することは、本当にNGなのか？」
「でも本当に自立している人なら、そもそもコンサルタントは必要ないのではないか？」
と、「自立型クライアント」って何なのか、訳がわからなくなりそうです。

わたしはその会話を聞きながら、あらためて定義が明確になった気がしました。
わたしたち専門家を有効に活用される「自立型クライアント」とは、

- ・最終的には自分で決断できる。よって、精神的には自立している。
- ・ただ、すべてに万能ではなく、社員との関係づくりやお金の流れの把握など、苦手なところはあつ。よって、そこを「専門家の力を活用する」ことで、役割としては依存している。

つまり、ひと言で言うと「常に主導権を握っている人」が自立的な人であり、他人の協力を借りることがあつても、それは依存ではなく活用と表現したほうがしっくりきます。なんだか禅問答みたいになってしまいましたが、ときに日ごろ頻繁に使っている言葉の定義を見直すことつて、大切だなと思ひました。